

Bangladesh・サイクロン災害復興支援プロジェクト

調査報告書

作成

SCI Bangladesh支部／SCI 日本支部

2009年1月

現地調査

(SCI Bangladesh支部)

アジアス・アティクル

(SCI 日本支部)

長田 庄司

池田 直

目 次

1.	はじめに	2
2.	調査概要	3
2-1	調査隊員	3
2-2	調査期間	3
2-3	調査地	3
2-4	調査内容	4
3.	調査概要詳細	4
3-1	インタビュー調査	4
3-1-1	インタビューの受け手について	4
3-1-2	インタビュー型式	5
3-1-3	質問内容	5
3-1-4	インタビュー調査についての詳細	6
	A-a ~ A-f 基本質問	6
	B サイクロンについて	6
	B-a 「シドル」について	6
	B-a-i 「シドル」襲来時の詳細	6
	B-a-ii 「シドル」による被害	7
	B-a-iii 「シドル」後受給した主な援助	8
	B-b 「シドル」以外のサイクロンについて	9
	B-b-i サイクロンへの対策の現状	9
	B-b-ii サイクロン「ラズミ」について	10
	B-b-iii サイクロンの理想的な対策	10
	C サイクロン以外の諸問題について	11
	C-a 教育について	11
	C-b インフラストラクチャーについて	11
	C-c 公共施設について	12
	C-d 産業について	13
	C-e 衛生について	14
	C-f 将来について	14
	C-g その他	15
	C-g-i 地主と小作人	15
	C-g-ii 移民	15
	C-g-iii 女性	15
	C-g-iv 子供	16
	C-g-v 身体障害者	16
4.	おわりに	17
5.	付録(写真)	18



1. はじめに

今回、SCI(サービス・シビル・インターナショナル、以下 SCI)バングラデシュと SCI 日本プロジェクトに関する合同調査に至るまでの経緯は以下の通りである。

1970 年、当時東パキスタンであった現在のバングラデシュを襲ったサイクロン被災の救援活動以来、1990 年代にかけて、SCI バングラデシュと SCI 日本は親密な関係を築いてきた。SCI 日本からは多数のボランティアが SCI バングラデシュ主催のワークキャンプに参加し、ともにボランティア活動を行ってきた。バングラデシュ南部ポリシャル地区モウドゥビには当時のボランティアたちによって建設された道路が地元住民の主要道路として残るなど、今でも彼らの当時の活躍ぶりがうかがえる。

しかしながら、その関係は 2000 年頃より疎遠となった。SCI 日本内部のボランティア派遣形態の変質などにより、暫くの間日本からのボランティアの派遣を見合わせていた。そもそも SCI アジア各支部との連携を基本活動方針の1つとしてきた SCI 日本にとっては、ボランティア派遣意志を特段失ったというわけではなく、派遣手段の変質による機会喪失というのが実情であった。

疎遠となった関係を近づけるきっかけとなったのは、また「サイクロン」であった。2007 年 11 月、巨大サイクロン「シドル」がバングラデシュ南部を襲った。このサイクロンはバングラデシュ史上、最大級のものであった。このサイクロンによる主な被害は以下の通りであった。

- ・ 死亡者もしくは行方不明者 4,234 名
- ・ 家屋全半壊 1,518,942 棟
- ・ 塩害などの農地被害 2,522,944 エーカー
- ・ 家畜死亡数 1,778,507
- ・ 道路崩壊 8,075km
- ・ 橋梁崩壊 1,687
- ・ 教育機関崩壊 16,954
- ・ 堤防崩壊 1,875km
- ・ 被災者 8,923,259 名

このサイクロンに対し SCI バングラデシュは素早く対応した。12 月と 2 月に被災地にて 2 つの復興ワークキャンプを開催し、家屋とトイレの建設を行った。世界各国からのボランティアがこれらワークキャンプに集い、日本からも景山昭二・萩原智直・安田純の 3 名が参加をした。この 3 人の参加が SCI バングラデシュと SCI 日本関係を再び密なものにし、今回のプロジェクト調査に至るまでの直接的な第一歩となった。

2008 年 6 月には当調査隊員でもある SCI 日本の長田が海外長期ボランティアに名乗りを上げたことを受け SCI 日本から SCI アジア各支部へ問い合わせたところ、すぐに SCI バングラデシュが応答した。同時に両支部による共同プロジェクトの立ち上げが提案された。プロジェクトを立ち上げる前に現地住民が抱えるより高いニーズを把握するため、SCI バングラデシュと SCI 日本による共同調査が企画された。そこで、私たち 3 名が調査隊としてバングラデシュ南部ポリシャル地区内のランガバリ地方へ派遣される運びとなった。当地は

バングラデシュの南部ボリシャル地区に位置し、サイクロン「シドル」の被害を最も大きく受けた地方のひとつであった。

2. 調査概要

2-1 調査隊員

調査隊員は以下の3名にて構成された。

- ・ アジアズ・アティクル(調査隊長・SCI バングラデシュ)
- ・ 長田庄司(調査隊員・SCI 日本)
- ・ 池田直(調査隊員・SCI 日本)

唯一、現地の言葉であるベンガル語を解するアジアズが直接の聞き手兼通訳、池田が間接的な聞き手兼書記、長田が2名の補助、という形態をとった。

2-2 調査期間

調査は以下の期間で実施された。

- ・ 10月13日～11月4日

出発地であるマイメンシンから調査地であるランガバリまでの移動期間を含む。また、サイクロン「ラズミ」の襲来により宿舎にとどまらざるを得ない期間も3日間あったことも付記しておく。

2-3 調査地

調査は以下の場所で行われた。

- ・ バングラデシュ国ボリシャル地区ランガバリ地方
- ・ バングラデシュ国ボリシャル地区モウドゥビ地方

地方内の詳細地域は以下の通りである。

- ・ チョル ジョムナ
- ・ チョル カンクニパラ
- ・ ウットリバラ
- ・ シャムダファット
- ・ ゴンギパラ
- ・ チョル ゴンガ

- ・ チョル カシエム
- ・ チョル ヒア
- ・ チョル カウカリ
- ・ チョル ハリム
- ・ ミルカンダ
- ・ カップパラ

「シドル」にて甚大な被害を受けた上記 2 地方内、12 地域が調査対象となった。

2-4 調査内容

調査の主な内容は以下の通りである。

- ・ 地元住民へのインタビュー
- ・ 当地域既存サイクロンシェルター・学校・病院等見学
- ・ 建築用土地候補特定

3. 調査概要詳細

3-1 インタビュー調査

3-1-1 インタビューの受け手について

受け手の合計は 70 名である。聞き手は受け手が特定の集団に偏る事を避けることを意識した。特に権力者や社会的強者のバイアスがかけられないよう心がけた。受け手 70 名のうち、性別は女性 36 名・男性 34 名であった。性別に関しては特段の偏りは無いものといえる。ただし、聞き手が全員男性であったため、女性の受け手が話しにくいものもあったことは考慮されるべきであろう。

性別にとは反対に、受け手の年代に関しては若干の偏りが見られる。というものの、受け手自身に実年齢を問うたところ、「わからない」、「だいたい〇〇歳」といった答えが非常に多かったことから、正確に把握するのは困難と判断したからである。代わりに、容姿でそれとわかる若年層を聞き手に取り込み損なわないことを意識した。

職業や収入についてはインタビューを進めていかないとわからないことであったが、職業に関しては、この地方特有のイリッシュ¹専門漁師にめぐり合えなかったことは残念であったが、結果的にほぼこの地方の縮図となりうる選択となったと思料する。また、収入に関しては「年齢」と同じように受け手が正確に把握していない場合が多かったため、聞き手が受け手の労働形態を具体的に聞くことや、シドル後の生活の変化を具体的

¹ イリッシュは川を遡るニシ科の魚で、バングラデシュ国の国魚。インドの西ベンガル地方を含め、ベンガル人の普段の食事やお祝い用の食事として大いに食される。近年の漁獲量減少により高値で取引される。ポッダ川名産で、ランガバリやモウドッピなどでも獲れる。

に聞くことを意識することで補うようにした。また、いわゆる身体障害者や未亡人・シングルマザー・1 夫 2 妻制の家と、さまざまな受け手を選択できたといえるであろう。

3-1-2 インタビュー形式

基本的には聞き手 3 名に対して受け手 1 名という形式で行った。ただし、特に若年層や女性の受け手で第 3 者に付き添ってもらったほうが話しやすいと願い出た者に限り、3 名対 2 名(受け手と付き添いの者)の形式をとった。その場合、聞き手は付き添いの者の意思が反映されないように意識した。環境上(道端など)、人目に触れることが多く常に人に囲まれた状態でのインタビューであったが、受け手と聞き手のやり取りに第三者が口を挟まないよう、あらかじめ取り囲むすべての人に徹底してもらった。

3-1-3 質問内容

質問内容は以下の通りである。

A 基本質問

- A-a 名前
- A-b 性別
- A-c 年令
- A-d 職業
- A-e 収入
- A-f 家族構成

B サイクロンについて

- B-a 「シドル」について
 - B-a-i シドル襲来時の詳細
 - B-a-ii シドルによる被害
 - B-a-iii シドル後受給した主な援助
- B-b 「シドル」以外のサイクロンについて
 - B-b-i サイクロンへの対策の現状
 - B-b-ii サイクロン「ラズミ」について
 - B-b-iii サイクロンの理想的な対策

C サイクロン以外の諸問題について

- C-a 教育について
- C-b インフラストラクチャーについて
- C-c 公共施設について
- C-d 産業について
- C-e 衛生について
- C-f 将来について

C-g その他

「学校はありますか?」というような「はい」、「いいえ」で答えられる質問ではなく、「この地域の教育事情を教えてください」というような、なるべくひとつのテーマに関して自由に受け手が語れるような質問を聞き手が意識して聞くことを意識しながらインタビューを行った。

3-1-4 インタビュー調査についての詳細

A-a~A-f 基本質問

基本質問については3-1-1で触れた通りである。

B サイクロンについて

B-a 「シドル」について

B-a-i 「シドル」襲来時の詳細 2007年11月のサイクロン「シドル」襲来時について、地元住民の話をまとめると以下のようになる。

「シドル」は突然やってきた。正確には、あらかじめサイクロン接近の警告は出されていたものの、テレビやラジオなどを持たない²住民が圧倒的に多く、警告を聞くことができなかったものが多数であった。また、中にはテレビを所有している知り合いからサイクロンの接近を聞いていた住民もいたが、過去において幾度となく予報が外れ、たいした被害を受けてこなかったため、今回の「シドル」に関しても特別な対策を必要としないと判断したようである。

具体的な当時の様子は以下のとおりである。

夜、強風が吹き荒れていたときのことだ。突然、津波のような水が一気に押し寄せ、あっという間に浸水が始まった。強い波が浸水の水位を数回に分けて高くしていった。水位が上がっていく中で、住民は水から逃れられる場所へ急いだ。大きく分けると、水が歩行不可能な高さまで達するまでにより安全な場所に間に合った住民と、間に合わなかったが結果的に助かった住民の2つに分けられる。

前者はさらに4つに分けられる。1 つめはサイクロン対策のために作られた施設・2 つめは川に沿って作られた堤防・3 つめは川から見て堤防の外側にある、高くて丈夫な家・4 つめは高い木の上である。

1 つめは、さらにシェルターとテイラに分けられる³。シェルターは、バングラデシュ建国以降世界中のさまざまな NGO⁴によって建てられ続けている2階建て以上のコンクリート製の高床式建物で、水にも風にも耐えられる設計になっている。規模にもよるが、500人から1000人の収容能力がある。常時は主に学校として使用される。今回の受け手の中からは、13人がここに避難した。一方のテイラは、主に70年代に赤新月社によって作られた大きなドーナツ型の丘で、ドーナツの丘の部分に家畜を置き、ドーナツの内側に人間が入るようにになっている。規模にもよるが、1,000人から3,000人の収容能力がある。常時の使い道がないこと、設置に莫大な土地を要することから、作られなくなってしまったようだ。今回の受け手の中からは11人がここに避難した。

² 今回の調査地ランガバリ及びモウドゥビには電気が通っておらず、一部の上流階級がソーラー電気、ならびにテレビを所有しているだけであった。

³ はじめの数日間、調査隊は両者を同義語だと思っていたため、明確な区別がないまま数日間調査を進めている。

⁴ 今回の調査地では KARITASH-ITALIANA と赤新月社により建てられたものがほとんどであった。また、モウドゥビでは GUP が新たにシェルターを建築するために地質調査を行っていた。

2 つめの堤防は、高波・洪水・サイクロンなどの対策として、主に大きな川に沿い、土を小高く積み上げて政府が設けたものである。堤防の上や川から見て堤防の外側であれば、比較的浸水の恐れは少なくなる。常時には住民の主要な道路として使われ、集落と集落を結ぶ役割を果たすこの道路なしには、主な陸上の交通手段⁵の移動範囲は極端に狭くなることになる。また、牛や水牛といった大型家畜を一度に大量に歩かせることのできる唯一の道でもある。今回の受け手の中からは8人がここに避難した。

3 つめの高くて丈夫な家は、言い換えると地域の比較的裕福な家、もしくは、権力者の家ということになる。そもそもこれらの家は危険度の高い堤防の川側ではなく、水が浸入しにくい反対側にある。今回主にインタビューの受け手となった住民の持ついわゆる掘っ立て小屋に比べ、しっかりとした作りとなっている。このような家は比較的大きく、収容人数も数百人単位であるようだ。具体的なそれらの家の持ち主としては「金持ちの家」・「コミュニティーリーダーの家」・「元コミュニティーリーダーの家」・「女性コミュニティーリーダーの家」という声が上がった。今回の受け手の中からは10人がここに避難した。

4 つめの高い木は、自宅近くに位置するヤシなどの丈夫で高い木や、政府が防波林として植林⁶した木を指す。上記3つの場所に比べると比較的数字は多い。1本の木に複数人が登ることできる。今回の受け手の中からは下記の結果的に助かったものを含め、20人がここに避難した。

一方の后者である「結果的に助かった」者は唯一の例外を除き、水に流されたものの流される中で幸い木の枝をつかんで木に移動ができたものが全員である。そこに至る過程は2つに分かれる。

1 つめは、上記の前者で述べた、より安全な場所への移動中に流されたものである。

2 つめ、は自宅の屋根の上に避難すること、もしくは小型ボートに乗ることで応急処置をしたものの、家の崩壊やボートの転覆によって流されたものである。唯一の例外は、流されたが山羊の死骸に乗りそのまま気絶し、翌日陸の上で山羊の死骸の上に横たわりながら意識を戻したというものがあった。

住民たちは以上の方法で暗い夜を過ごし、朝を迎えるのを待った。

B-a-ii 「シドル」による被害 今回の「シドル」により、多大な被害が出たことは「はじめに」に記述したとおりである。被害の甚大さは今回の調査地も例外ではない。

「シドル」の直接的な被害については以下のとおりである。

今回の調査地でも多数の死者や行方不明者がでたが、350人の人々が亡くなったチョル ヒアでは、妻と娘を亡くした住民が、その痛ましい記憶を涙ながらに語ってくれた。自分の目の前で妻が波にさらわれていったというものであった。これは今回のインタビューの中で、肉親を亡くした住民の唯一の話となった。

家屋については、インタビューの聞き手全員の家が、半壊もしくはそれに準ずるものを答えた10名を除き、全壊であった。全壊の中でも、波や流れが土台以外すべてを奪っていったしまったという声がほとんどであった。中には土台さえも無くなってしまったという声さえも聞かれた。

家畜⁷に関しても、インタビューの聞き手大半の家畜が全滅という回答であった。家畜を鎖から放す余裕がなかったことや家畜小屋のドアを開ける余裕がなかったこと、野放しにされていた家畜も高波や強い流れに

⁵ 主な陸上の交通手段としては中型自動二輪車およびトントと呼ばれる乗り合い自動三輪車がある。バングラデシュのいたるところで見られるリキシャは、調査隊が見た限りではランガバリの中心地にて1台しか見つけることができなかった。

⁶ 調査中よく耳にしたのは森林省の活躍である。実際調査地に行く途中や調査地にて政府が植えた木々をいたるところで見ることができた。

⁷ この地域の住民の多くは日ごろの生活用や緊急時の資金繰り用、商売用として家畜を所有している。具体的には、水牛・牛・山羊・羊・鶏・家鴨・鴨などである。

さらわれたことが原因に挙げられる。一部の家畜が生き残ったと答えた住民も 7 件あった。それら家畜たちは、強い流れの中で木の枝に偶然引っかかって生き残ったようだ。

道路に関しては上述の堤防がいたるところで崩壊し、道としての機能を果たせなくなった。また、堤防以外の小さな小道や木をつなぎ合わせた簡易な道も大部分が無くなってしまった。

次に、「シドル」の間接的な被害は以下のとおりである。

まず、さまざまな病気が蔓延した。特に脅威となったのが食中毒をはじめとした下痢、とりわけコレラによるものである。また、流感や皮膚病・目の伝染病なども同じように流行した。これは、「シドル」の影響で井戸水以外の水が極端に不衛生になったことや「シドル」によりトイレの数が極端に少なくなってしまうことなどにより発生・蔓延したものと思われる。

「シドル」後の生活の変化についても聞いた。多くの住民が、「貯金や収入が減るなどして生活が苦しくなった」と答えている。主な原因は大きく分けて 4 つある。

1 つめとして挙げられるのは、「シドル」により失われたものの再購入である。B-a-iii で後述する政府や NGO からの復興支援では得られなかったものに関しては、自らの資金で買い直さなくてはならなかった。彼らの多くは、家を建てるための資材調達や生活用品および商売道具の再購入を余儀なくされ、貯金を取り崩さざるを得なかった。

2 つめとして挙げられるのは、「シドル」により以前のように仕事ができなくなり収入が減ったことである。商品として家畜を飼育していた住民は、既述したように家畜を失った。池で魚を養殖していた住民は、池が溢れたため魚の数も極端に減った。漁師はボートと網を流されて商売ができなくなった。農業に従事しているものは塩気のある水が田畑に入ったため塩害を被り収穫が著しく減った。自動二輪車の運転手はしばらく道が復興しなかったため、その間仕事ができなかった。

3 つめとして挙げられるのは、物価の上昇である。もともとバングラデシュは近年かなりのインフレ傾向にあった。そこに「シドル」が到来して物不足を呼び、物価を更に上昇させ、住民の生活を苦しめるに至った。

4 つめとして挙げられるのは、借金によるものである。上に挙げた 3 つを補うため、知り合いや NGO、闇金に借金をする必要のある住民もいた。年率 10% 以上の高利が住民の生活をよりいっそう苦しいものにした。また、後述もするが、復興支援を得るために地元の権力者に代金を払わなければならない、そのために借金をせざるを得なかった住民もいた。

一方、少数であるが、数ヶ月間の収入が上がったと答えた人もいた。「シドル」後、政府や NGO による道路や建築物などの復興プロジェクトが増えた。これにより雇用が生まれ、これに携わった建築関係者や日雇い労働者の収入が上がったようである。ただし、これらのプロジェクトは一時的なものであり、「シドル」から約 1 年経ったインタビュー時にはほとんどが元の生活に戻ったもしくは上述の理由も相まって前の生活よりも苦しくなったようである。

B-a-iii 「シドル」後支給された主な援助 「シドル」後には政府やさまざまな NGO がさまざまな復興支援を行った。ただし、外から引っ越してきたまま住民登録をしてこなかった住民は、政府からの援助を受け取れていない。また、「シドル」により家を失い、遠くの親戚や知人の家にとどまっていた住民で受給する機会を失ったものもいる。また、支給される品物が、一度その地域の権力者に託された後に住民に配られるというシステムをとっているため、これを悪用する権力者もいるようだ。カップバラでは支給されるべき家屋資材を受け取るために、権力者に 12,000 タカを支払うことになった住民もいた。

金銭の支給についてはバングラデシュ政府からのみで、NGO から受け取ったものは今回インタビューを受けた住民の中にはいなかった。一世帯あたり政府より 5,000 タカが支給され、それぞれ思いのままのもの

の購入に充てられた。家族の一部を亡くしたものは 10,000 ㌦を受け取った。しかし、今回の Cholera ハリムで家族を失った住民はその受け取ったすべてを葬儀代に充てている。

家に関しては、家そのものがサウジアラビア政府やとある NGO⁸から援助された人もいる。

また、サウジアラビア政府や ADMD・OXFAM・SHAP・イスラム基金などによりトタン板・プラスチック板・わら・木材が支給され、多くの人がそれらを受け取った。特にトタン板に関しては数が多かったようである。これらで家を作った住民もいれば、トタン板などは換金した住民もいた。トイレは絶対数が少なかったものの、主に ADMD と SCI から支給されたようである。

毛布や衣服などの衣類はバングラデシュ政府や ADMD・SHAP・Netherland などから、料理用品や蚊帳などの生活用品は ADMD と COTACK などからの支給であった。食料については、米が政府とセーブ・ザ・チルドレン・USA から数ヶ月に分けて支給された。セーブ・ザ・チルドレン・USA からは約 1 年が経った今でも受給し続けている住民もいた。また、ドライフードの支給もされたようだ。

B-b 「シドル」以外のサイクロンについて

B-b- i サイクロンへの対策の現状 一般的なサイクロンに対して住民たちは現状の対策をどう思っているのだろうか。インタビューをした限りでは、満足な対策を講じていることができていると思っている住民は一人もいないようであった。以下は現状のサイクロン対策に対する意見である。

シェルターに関しては、土地の広さと人口にシェルターの数が合っていないという意見が多く寄せられた。「最寄りのシェルターまで歩いて数キロあり到達するまでに数時間かかる」、「せっかくシェルターに行ったが人がいすぎて中に入れなかった」というものである。ウツリパラでは「選挙権を持った人でさえ 1,200 人いるのに、この地方の唯一のシェルターは 450 人くらいしか入らないのではないか」といった具体的な意見も寄せられた。

シェルターにたどり着くまでの環境に関する意見も出た。「サイクロン襲来時には道が無くなって、シェルターに行けない」、「サイクロンのときに危険な橋を渡ってシェルターのある向こう岸に渡るのは不可能」、「舟がないので渡れない。コテイラ岸にはシェルターがない」、「夜は真っ暗で見え、シェルターなど行けない」といったものである。特にこの問題は、女性・子供・お年寄り・身体障害者の住民にとって深刻であった。

シェルターの古さを指摘する声もあった。「階段部分の壁が剥げ、非常に危険」、「シドル」のときは、あんな古い建物に信じられないほどの人が入ったので、壊れるのが怖くて外に出てきた」といった声である。

テイラに関しては、「テイラまでの距離が遠すぎる」、「橋や道路など、たどり着くまでの手段がない」、「夜には動けない」など、シェルターと同じ意見が出た。シェルターとは別の意見としては、「屋根がないので風などで危険」という、テイラの構造上の問題に恐怖を感じているものもあった。

堤防に関しては、テイラに関するものは常に堤防に対しても同様の意見が寄せられた。堤防特有のものとしては「土を盛っただけなので、崩れやすい」といった意見が上がった。実際当時はかなりの堤防が崩壊したせいで、シェルターに行くことができなかった住民が出た。また、それら崩壊は、川から見て堤防の外側に非難していた住民にも相当の恐怖を与えたようだ。1 年経った今でもまだ修繕されていない大規模な堤防の決壊が、Cholera カウカリや、調査隊がランガバリよりモウドゥビへ行く途中にも見られた。

木に関しては、「本当はもっと安全な場所に行きたいが、やむを得ず木に登ってサイクロンを避けた」といった趣が強い。「風でいつ折れるか不安」、「風に振り落とされる」、「重みに耐えられるか不安」といった声が非常に多かった。最大級のサイクロンが来ると最大瞬間風速は 70m を超えることもあり、風に耐えられなくなる

⁸ 住民の多くは、物品がどこから支援されたかきちんと把握しているわけではない。インタビュー中は「誰かがくれた」という表現が多く聞かれた。

木も出てくる。また、1本の木に複数人登るので、多くの木は非常に折れやすくなる。そういった危険度の高い避難手段にもかかわらず、チョル ヒアやチョル カムでは、上記のようなサイクロンを避ける施設などがなく、住民は木を「唯一の避難場所」としていた。

その他の現状の対策としては、「次いつ大波が来てもいいようにボートを購入した」という住民が1名いた。効果のほどはさておき、このような積極的な具体的対策を講ずる住民は少数派であった。実際は「助けてくださいというしかない」、「サイクロンが来たときは神に運命を委ねるしかない」といった言葉をインタビュー中によく耳にした。多くが「シドル」の経験からサイクロンに対して大きく恐怖心を抱いているにもかかわらず、具体的に効果的な対策を、地理的、金銭的理由から講じられないでいるのが現状であった。

B-b-ii サイクロン「ラズミ」について 停滞して2日間断続的な大雨をもたらしていた熱帯低気圧は、2008年10月26日の夜、突然暴風を伴うサイクロンに変わった。政府による危険度は「7」⁹で、6名の死者・行方不明者が発生した。このサイクロンは「ラズミ」と名付けられた。

今回の「ラズミ」には、たまたま調査隊が現地に行ったところに遭遇したので、最終日のモウドゥビでのインタビューは「ラズミ」時の対応や印象も聞いた。以下はその概要である。

風が本格的になったとき、多くの住民は「シドル」の再来を考え恐怖の夜を過ごすことになった。ある住民(漁師¹⁰)は舟を用意し、すぐに移動できるように備えた。しかし、波自体はまだ高くなかったので、避難場所などには行かなかった。ある住民は地域のコミュニティーリーダーの家へ避難した。そこにはすでに100人くらいの人たちが避難していたという(「シドル」時は600人が避難していた)。また、ある住民はテイラに移動して一晩を過ごした。ある住民は特別どこかへ移動したわけではなかったが、「近くにシェルターがあったらそこへ移動した」と答えている。

「ラズミ」によりバナナの木、23本が折れたという被害にあった住人がいたほか、堤防のメインロードではない泥を小さく盛ったような小道がところどころで崩壊していたのが調査隊の目でも確認できた。

B-b-iii サイクロンへの理想的な対策 サイクロンに対する理想的な対策を聞くと、「現状の改善以外には何も考えが浮かばない」という意見が大半であった。その改善の先には「シェルター」もしくは「テイラ」、さらには「そこへ行くまでの環境整備」といったところに行き着きそうである。

「シェルター」に関しては、屋根があること高床式であることなど、構造がサイクロン用にできているため、住民に大きな安心感を与えるようだ。しかしながら前章で見えてきたように、収容人数や遠さ、古さに問題があるのが現状である。今後、より収容人数がより多いシェルターが建設されることや、シェルター自体の数が増えること、さらには既存のシェルターの修理や半恒久的な使用が可能なシェルターの建設が求められる。

「テイラ」に関しては、収容人数の多さと家畜を置いておけることが住民にとっての大きな魅力である。多くの地域の「シェルター」は中に全員が入りきらず、外で嵐が治まるのを待たなくてはならない住民が出てくる状態であり、家畜を連れてくることなどもってのほかである。それに対して、「テイラ」は比較的多くの人数が収容でき、家畜も連れてくることのできる。収容が比較的保障されることや、サイクロン後の生活を少しでも楽なものにしてくれる家畜の存在を守れることは、住民にとって非常に重要なことである。

⁹ 政府により危険度を10段階にわけてアナウンスされるもの。「ラズミ」はサイクロンに変わったときには「3」であったが、「5」、「7」と一気に危険度を上げた。「シドル」は危険度「10」であった。

¹⁰ モウドゥビでインタビューをした漁師は他の地域とは違って海での漁を主としている。これはモウドゥビのサイクロン被害地域が海に直面しているからである。したがってこの地域は海の高波や津波などの影響を直接受けやすい傾向にある。

住民の意見は「シェルター」と「テイラ」で 2 つに分かれる。命を保障してくれるがすべてを失う可能性がある「シェルター」と、安全性では劣るがサイクロン後の生活を少しでも保証してくれる「テイラ」の選択は、前半調査隊が両者の違いを理解していなかったこともあり、住民の総意をつかむことはできなかった。

「シェルター」にせよ「テイラ」にせよ、そこにいたるまでの環境の改善に関しては、住民の総意として意見を捉えることができた。嵐の中でも歩けるような丈夫な道、安心して渡れる橋、夜でも動けるための電気などがそれである。

C サイクロン以外の諸問題について

C-a 教育について

バングラデシュの教育制度は宗教学校と普通学校に分かれる。前者の宗教学校は、アラビア語など宗教に関する科目が多いのが特徴的だ。それに対して後者は宗教に偏らない科目が教育される。宗教学校はモスクやそれに準じたものにて教育がなされるが、普通学校はシェルターの常時を使ってなされる。シェルターが建っている場所の大部分は、もともとすぐ近くに学校が建っていた場所で、今はシェルターと、もともと建っていた学校の 2 つが同時に同じ管理者の下、動いている状態である。今回の調査では、絶対数も多い普通学校の生徒たちの意見が多数を占めている。

学校はシェルターと同じ建物を使っていることから、学校に関する問題はおのずとシェルターにて問題になったものと似てくることも多かった。「最寄りの学校まで 2 キロあり、なかなか到達できない」、「遠すぎて行くのを止めてしまった」、「隣町まで行かなければならない」、「登校時間の長さから、授業前に疲れてしまう」という距離の問題が何より多かった。特に子供たちの足には負担が大きすぎる遠さであることが多いようだ。

また、「年齢制限により入れなかった」や「子供の数が多くて受け入れてもらえなかった」というような収容人数の問題で、入るには何らかの制限があるのもシェルターと同じであった。「雨季になると学校に行かせられない」、「毎日舟でボートを渡るのは危険」といった、学校に行き着くまでの環境も特に子供にとってはつらいものであった。2 階や 3 階部分の階段の壁が無いチョル カウカリの学校へ子を通わせている親は「あんな危険なところで子供が毎日を過ごすのはとても心配」という、古さや決壊を指摘した。シェルター自体が無いチョル ヒアやチョル カシムでは、「そもそも教育の機会がない」という意見しか出なかった。

シェルターとは違う教育独自の問題としては、「幼稚園(就学前教育)はあるがそれ以降は無い」「初等教育¹¹の学校は近くにあるが、中等教育の学校は近くに無く、2 時間かかる中心地まで行かなくてはならない」といった、教育が進むほど学ぶことが難しくなっていくということが挙げられた。また、直接住民からは挙げられなかったが、調査隊が現場を覗いてみて感じたことは、1 学級に対する生徒の多さや教師が座り続けて講義をすること、教師が生徒に向けて一方通行的な講義をすることなどがある。

C-b インフラストラクチャーについて

インフラストラクチャーについては、特に道と橋について話を聞いた。尚、一般的にインフラストラクチャーとは道や橋のほかに電気や水道、学校、病院などを含む。電気については B-a-i の注 1 で述べたとおりである。また、水道については C-e「衛生について」にて述べることにする。学校については前項で述べたとおりである。病院については C-c「公共施設について」にて述べることにする。

道については「堤防」や「サイクロン避難場所への移動時の環境」で頻りに触れている

¹¹ 普通教育では「5・3・2・2 制」で、最初の 5 年間で初等教育、それ以降の 7 年間で中等教育と呼んでいる。

が、改めてここでまとめたい。この地方の道路は大きく、メインロードとなっている堤防兼公道と、そこから派生する私道に分けられる。堤防兼公道は、唯一交通手段が行き交い、大量の家畜も運べる文字通りのメインロードとして機能している。土を盛って作ってあるので、サイクロンのような嵐が来たときには壊れやすいことと、雨が降ると道自体が泥となり、非常に滑りやすくなるという難点はあるものの、私道との質の差は歴然であることから、住民から重宝がられているのが現状である。

それに対して、今回の調査地で住民が主に使用していた私道は、かなり多くの問題点を抱えている。まず前提として、その名のとおり私道は誰かの所有物であるということだ。「渡らせてくれない」という声はさすがに出なかったが、「他人の物は使いづらい」という声は寄せられている。

次に、質に対する意見は非常に多かった。「狭い」、「夜歩けない」、「泥なので滑りやすい」、「田んぼを歩いているようなもの」といったものだ。実際の幅は約 20~30cm で、人間 1 人がやっと通れるくらいであった。また、夜、電灯などはもちろん無いので非常に歩きにくくなる。土を盛っただけなので、雨季になるとすぐに泥と化し、滑りやすくなった。立地的にも、大抵田んぼの真ん中に私道は位置しているので、ところどころ崩れた私道は田んぼと見分けがつかなくなっていた。ほかにも、「雨季ごとに道がなくなるのではなく、常に存在する道がほしい」といった意見や「蛇に噛まれるため危険」という意見も出ている。

インタビュー中、当話題に触れたとき、住民より「実質、道など無い」や「逆にあなたたちはこの道を歩いてきてどう思いますか?」といったような意見や質問が多く寄せられたこともここに記しておかなければならない。

橋に関しては、メインロードである堤防のすぐ近くであれば、幅のある丈夫な橋も見ることができる。しかし、今回の調査地になった場所では、非常に脆弱なものをいくつか見ている。幅 10~20cm の木をつなぎ合わせたもので、幅 5~10cm の手摺で 5~10m の川幅を渡ることになる。このような橋でもあればまだ良く、渡し舟に頼むか体を水に浸しながら渡るしかない場合もある。住民からは「川が渡れないので橋があれば」や「橋があれば購入した品物を家まで運んだり、売るための商品を運べたりすることができるのに」といった声が聞かれた。

C-c 公共施設について

公共施設に関しては、特に病院や、そこから病気についての話に及んだ。病気については C-e「衛生について」に譲ることとする。

病院については、基本的に住民は複数の選択肢を持っているようであった。以下に挙げる項目は、住民の基本とする病気発症時の対応で、前に挙げるものであればあるほど症状の軽いものへの対応時、逆に後ろに挙げるものであればあるほど症状が重いものへの対応時の処置となる。病気になったときにより容易にいけるものとして薬局がある。これは正確には病院を指さないが、住民は病院代わりに薬局へ行き、薬剤師の免許はあるかどうかは定かではないが、薬局の店員にアドバイスをもらい、薬を購入する。容易とは行ってもチョル ヒアには薬局が無いため、チョル ヒアの住民はモーター付の船で 1 時間以上、モーター無しの舟で数時間かけて薬局のある場所まで移動しなければならない。

次の選択肢はランガバリであれば船乗り場付近の中心地、モウドゥピであればカップパラにある簡易病院施設へ行くことである。今回の調査地からは大抵トントンで1時間以上をかけなければ到達しない場所である。ランガバリのそれは、もともと主に家族計画など保健センター的な役割を担っているが、医者も駐在している。簡易病院施設自身としても、設備の貧弱さから、自らの役割を軽い症状への対応に限定している。重病患者に対しては以下に挙げるような大病院への橋渡しの役割と認識しているようであった。

最後の選択肢としてはゴラチバ、ポトアカリ、ポリシャル(左から順に街と病院の規模は大きくなる)へ行くことである。これらの街は大きく、それなりの病院施設がそろっているようだ。しかしながら、これらへ連れて行くには半日以上が必要である。「危ない状態にはしっかりした病院に連れて行きたいが、危ない状態だけにこれだけ時間がかかったら死んでしまう」という意見も出ている。実際生まれたばかりの赤ちゃんが病気にかかり、ポリシャルに連れて行っている間に死んでしまったと、つい数日前の痛ましい出来事をチョル カウカリでは語ってくれた。

以上が住民の病院に対する基本的な認識である。上記以外には以下のものがある。ドクターと呼ばれるが、「医師免許は無い『物知り』に聞く」、「何か特別な力を持った人に頼む」、「呪術師に頼む」といったような、個人の何かしらの力や知識に頼ることもあるようだ。また、「Netherland の治療船が不定期に(1・2 ヶ月に 1 回)やってきて治療してもらおう」という話や、「村を巡回している医者も数は少ないがいて、その医者に見てもらおう」という話もあった。

同時に、「病院は無いからどこにも頼っていない」という意見や「病気になったときにはただ自然治癒を待つ」、「神に祈る」という、実質何の対応もしていないという意見も少数ながら聞くことができた。

C-d 産業について

今回の調査地における産業の問題点は以下のとおりである。産業については、資産について大きな問題があるようである。今回の調査ではほとんどの住民が家屋用以外の土地を持っていなかった。他からの移民で、登録をしていない住民は、家屋用の土地さえも所有しておらず、いわゆる不法占拠の状態であった。多く住民は、地主が所有する土地を借りるなどして小作料を払いながら農業をしていた。農業だけでなく、池などを借りて養殖場とする住民もいた。土地を貸す側の話によると、「50%を賃料としてもらう」のだそうだ。借りる側からは「体以外に資産・資本は何も無い」という意見も出た。また、多くの日雇い労働者も、これら農業や漁業を手伝うことで収入を得ていた。日雇い労働者はその労働の性格上不安定なのに加え、「シドル」以降、土地は塩害を被るなどしたことなども手伝い、「日雇い労働者には仕事が回ってこない」という意見が寄せられている。「ここは一部の大地主と多数の小作人で成り立っている」という言葉が印象的であった。

多少の土地を所有している住民もいた。しかし彼らは「土地はあっても資本が無いので何もできない」とのことで、有効に活用されていないようだ。調査隊の印象によると、資本が無いことも事実であるが、同時に、住民の多くは土地を有効に使う手段の選択肢もまた多く持ち合わせていないようであった。

以上のほかに、1 人や 2 人という少人数ながらも以下の意見も寄せられている。漁師からは、「農業の発達により魚が減った」という意見が出た。農業の発達により灌漑設備ができたことで水が今までどおりでなくなってしまったこと、化学肥料が撒かれることによる水質汚染が原因という話だ。また、単純に漁師からは「ネットとボートが小さい」、農民からは「土地が小さい」という話も出た。

また、以下は厳密には産業に関する話ではないかもしれないが、公共事業の話に付随して出た話なので、ここに述べることにする。ある住民は「公道を作るために少ないながら所有していた土地を明け渡してしまった」という。バングラデシュではこういった場合、補償金をもらえることになっているが、住民は「もらえなかった」らしい。自治体からお金が出たものの、いったん地元の権力者を經由して支払われる過程をとるため、今回住民へ支払われるべきであった保証金は地元の権力者によって横領されてしまったのではないかと調査隊は思料する。

C-e 衛生について

衛生については、かかりやすい病気・トイレ・飲料水について聞いている。かかりやすい病気については実にさまざまなものが挙げられた。特に多かったものは以下のとおりである。下痢(コレラと答えたものも含む)・腹痛・食中毒・皮膚病・風邪・感冒・目の病気・肝炎は特に多く、 Chol カシムではインタビューより過去半年以内に下痢による死者も出ている。ほかにも高血圧・外傷・嘔吐・心臓病・胃もたれ・水疱瘡・栄養失調・ウイルス性感染症・妊娠に関する病気・ヘルニア・糖尿病・癌・体全体の痛み・麻痺・先天性障害(足)などさまざまなものが挙げられた。しかしながら、C-c で挙げているように、病院などの対応機関は非常に貧弱なものであるか、遠くゆえに十分な治療がなされていないのが現状である。

どのようなトイレを使っているかは、大きく3つに分かれる。1つめはADMDやSCIなどに「シドル」復旧用に支給されたものを使用するものである。これらのトイレはコンクリート製の土台で作られるなど、比較的丈夫なものとなっているが、清掃をこまめにするなどしないとハエが湧きやすくなる。2つめは川の水辺の上に木で土台を作り、汚物は川へ落とすものである。丈夫とは言い難い。ハエは湧きにくいですが、落ちた汚物が行く先は生活にも使われる可能性がある川であることから清潔ではないと言える。3つめはトイレを所有しておらず、近所の人に借りるか、川でするかというものである。上の3つ如何に関わらず、「生活している上で常にハエが発生しやすく、そのハエがさまざまな病の病原体になっているのではないか」という意見が出ている。

飲料水については主に井戸の話が中心になった。今回のインタビューを受けた住民の中では、家から井戸までの距離は0分から3時間¹²と非常に大きな差が生じていた。また、C-b で触れたような道や橋の問題も、密接に関わる問題として取り上げられた。住民は0分から3時間の道のりをかけて井戸の水を日々取りに行く。しかしながら「遠い」、「道が不便」、「井戸は川の向こう」、「井戸水を得るために細い橋を渡らなくてはならない」、「雨が降ると実質井戸に行くことは不可能」といった理由で、必ずしも毎回井戸水を得られているわけではないようだ。その場合、川の水に消毒薬を入れるか、沸かすか、Oxfam から支給された浄水装置を持つ住民はそれを使うかした後、飲料水として使用する。中には上記のような手順を踏まず、直接川の水を飲むという住民もいた。

衛生の大切さについては学校で教えられるなどで多くの住民に認識されているにもかかわらず、さまざまな要因によってそれが100%実際に行われているわけでは必ずしもないようである。

C-f 将来について

将来についても聞いた。子供か子供以外かでは大きく答えが変わってくるようであった。

子供に将来について聞くと、「先生になりたい」や「公務員になりたい」、「勉強を続けてより良い職に就きたい」、「経済的に家族を助けられる職に就きたい」、「学業を修めたい」、「クリケット選手になりたい」、「医者になりたい」というような、正義感と夢に満ちた答えが多く返ってきた。

子供以外の住民の答えにも、現実的ながら野望を持った答えも返ってきている。「野菜を育てて経済的に楽になりたい」や「安月給なので転職したい」、「今は日雇い労働者であるが、資本を得て商売をしたい」、「山羊を買って商売をしたい」、「こつこつと貯蓄をしたい」、「子供に学校を卒業してもらって経済的に助けてもらおう」といった答えがそれである。

しかしながら、将来についてなんら描いていない、もしくは描けないという意見も多数出た。「将来など考えていない」、「死を待つのみ」、「今の生活で精一杯」、「神のみぞ知る」、「年を重ねても何も変わらない」といったものがそれで、非常に悲観的であり、且つ具体的な策は何も無いといったような印象を受けた。

¹² 0分は家の目の前にある場合。Chol カシムでは島に2箇所しかなく、うち1箇所も「シドル」後ADMDが設置したという比較的新しいものであった。

また、将来に関して非常に不安という意見も出ている。「子供はどうせ面倒を見てくれない」、「移民なので住民としての権利が無いので非常に不安」、「経済的に将来が不安」といった意見がそれである。

C-g その他

最後に「何が今 1 番ほしいですか?」という質問をした。「すべて」と答える人もいたが、無理にでも 1 番を考えてもらった。また、調査の最初の方は調査隊がシェルターとテイラの違いを区別していなかったため、その区別はあいまいである。シェルター 24 人・テイラ 12 人・病院 12 人・学校 10 人・井戸 5 人・道路 4 人・土地 2 人・家 1 人というのがその結果であった。

また、質問項目には無いものの、自由に述べてもらったものや、調査隊が気づいたことは以下のとおりである。上述したものも含まれるが、視点を変えているのでご容赦願いたい。

C-g-i 地主と小作人

今回の調査でインタビューをした住民の多くは「小作人」であった。「小作人」というと農業に限定されるが、ここでは農業だけにとどまらず、漁業やそれらに不定期に関わる日雇い労働者も含めたものとする。彼らは労働力を搾取され、常に地主のために低賃金で働いており、将来に対する希望も特に無い。小作人はいくら働いても地主にはなれず、搾取される側に常にたたされることになる。小作人の雇用の数は、国・地方の経済や気候の影響を直接受けることになり、彼らの生活に直結することになる。また、地主はその地方の権力者になることが多く、その地方の権力者の中には B-a-iii や C-d で見てきたように、その地位を悪用して金儲けをしたり、更に上からの資金を横領したりと、不正に走る者もいるようである。

C-g-ii 移民

調査中、多く聞かれたものとして「移民」という言葉があった。普通「移民」というと労働目的で外国に移り住むことをいうが、ここでは何らかの理由で元いた場所を動き、今回の調査地に移り住んできた者を指す。彼らは住民票などへの登録が無く、いわば不法占拠をしている状態で住んでいるのであった。彼らはサイクロン時などに送られる緊急物資や資金を、住民登録をしていないという理由から受け取ることができない。また、自らの土地を持たないことから日雇い労働者になるしか選択肢がなく、「地主と小作人」の中で出てきたような経済の好況・不況が直接生活に反映するという立場にあるものが多い。彼らからは「不安定な生活で将来が不安」という声が聞かれた。

移民たちは「不法滞在」をしている性格上、街の中心から離れたところ、特に堤防からも遠い場所に住まざるを得ない。すると、彼らの住居から学校までの距離は自ずと遠くなり、子供たちは学校まで長い時間をかけていか、もしくは遠さゆえに行かなくなってしまう場合が多い。また、サイクロン襲来時にはシェルターまでの距離も遠くなるため、シェルターまでもたどり着かないこともある。ただ距離が遠いというだけでなく、学校やシェルター、病院、商店街など経済や文化の中心地までの道も、整備されていないことが多い。

C-g-iii 女性 調査の対象の半分以上が女性であった。インタビューをしてはじめて気づかされるのは、子供以外の全員の職業が「主婦」もしくは「日雇い労働」であるということだ。「日雇い労働」でも賃金は男性の半分程度の場合が多かった。もしくは賃金ではなく、物品支給の場合もあった。また、「主婦」と答えた住民が多かったが、井戸の水汲みや買出しのための道が整っているわけではなく、彼女らの働くための環境が整っているとは必ずしも言えるわけではなかった。離婚をして 2 人の子供をシングルマザーとして育てる女性からは、子供を学校に通わせられていないなど、生活の苦しさを訴えられている。

しっかりとした考えを持っている住民¹³に対しては「将来」に続いて「もし男性だったら？」という質問もしている。「男性(夫)はだらしがないので、夫と同じことをやってみたいが、もっとまじめにやる」や「商売をしてみたい」といった声が聞かれた。「そんなこと考えたこともない」という答えも返ってきている。身体障害者の女性からは「男性だったらもっと病院に行けるのに」という意見も寄せられた。

女性の病気に関しては、調査隊が全員男性だったこともあり、有効な答えを得られたわけではなかった。しかしながら、チョル カウカリの女性が産まれたばかりの赤ちゃんを遠くの病院に連れて行っている間に亡くしてしまったという話や、「女性の病気」以外の病気に対する現状の対策等を勧告する限り、「女性の病気」に関しても決して満足な設備が整っているとは想像できない。

興味深い点としては、コミュニティーリーダーに両性別から一人ずつ選別しているという点だ。効果のほどは定かではないが、これは片方の性別に意見が偏らないようにという配慮からである。「災害対策に関する代表者会議」を覗かせてもらったが、そこでも全体の 3 分の 1 以上は女性で、代表として送り込まれていた。

C-g-iv 子供 最大の問題点は「学びたいのに学ぶ機会が無い」という子供がいることである。学ぶ機会が無い理由の 1 つとしては、C-a でも挙げたとおりチョル ヒアやチョル カムでは学校そのものが無かったり、学校の収容人数が少なく年齢制限などのふりにかかったり、学ぶ機会が無いものである。また、もうひとつの理由としては、距離も通学可能で収容人数も余力があるにもかかわらず、経済的な理由で子供を学校に行かせられないというものがある。バングラデシュでは女性の教育に関しては入学料と授業料を無料にすることで行きやすくなっているが、それでも教科書代や文房具代は払う必要があり、行かせられないという意見も出ている。

また、A や C で触れたすべての項目は、子供にとってはなおさら不利であることが言える。サイクロンやテイヤ、学校、病院へ行き着くまでの道や橋は平坦ではなく、子供にとって非常に通りづらいものとなっている。また、病気も子供は大人に比べてかかりやすく、病気に対して恐れながら生活しているのが伺えた。労働に関しても、子供が働いた場合、大人に比べて低賃金のようなものである。

インタビューの受け手以外の子供であるが、街でいつも悪さをしている少年に話を聞くことができた。彼は学校に行っているが、学校以外は常に街にいて、家には 11 時等、遅くなるまで帰らない。彼の母親は父親の再婚者で、少年の本当の母親ではない。彼女はいつも少年に意地悪をするので少年は家に帰りたくないそうだ。10 歳そこそこであったが煙草をくわえ、薬物にも手を出しているようであった。

C-g-v 身体障害者

身体の障害に関しては、医療機関が近くにあり、適切な治療を受けていれば軽く済んだかもしれないのにというものもあった。

チョル、ハリムでは左足を失った住民が、失ったときのことを話してくれた。彼は若いころ、いわゆる健康者であった。ある日、彼の足に非常に鋭い葉が突き刺さった。その葉は毒性であったのか、彼の足はすぐに腫れて痛さと痒さがそれに伴った。少々放っておいたが一向に悪くなるばかりであったので、ホメオパシーを知る人のところへ行き、ホメオパシーによる治療を行った。しかし、それでも悪くなる一方であった。彼はとうとう病院へ行ったが、時はすでに遅く、足を切る以外に方法が無かったそうだ。そして、彼は今でも松葉杖を

¹³ 特に女性と子供の中には少々抽象的な質問になると答えられなくなるものも多数いた（調査隊の数や性別・外国人という見かけによるものか、十分なエンパワメントがなされていないという問題と思われる）ので、全員に聞いたわけではなく、答える余力のあるものに限定している。

ついた生活を送っている。このように、少しでも早くしっかりと治療が行われていたら、結果は違っていたかもしれないような例が見られた。

身体障害者の人たちにとって調査地付近は、非常に住みにくい環境であることは、ほかの項目からも容易に想像できるであろう。「次にサイクロンが来たら今度こそ死ぬ」、「一人ではどこにも行けない」、「誰かに頼るしかない」という声が聞かれた。実際の道はとても障害者の住民を考慮されたものとは言えず、移動には常に苦勞が伴うそうである。

また、障害者の人たちの多くは家にとどまることが多く、「孤独を感じる」という意見も寄せられた。

4. おわりに

「サイクロンとサイクロン以外全般」という途方もなく広い範囲を、調査は初めてという 3 人が行った。結果、調査の準備段階で想像しきれなかったこともあり、現場で話し合わざるを得ない場面もあった。また、質問の仕方がうまくいかず、インタビューでうまく回答を得られなかったこともあった。抽象的な内容は住民に理解されず、途中から具体的な質問に重きを置くようにもなった。さまざまな乗り越えるべき壁を越え、何とかインタビューを終えることができた。

「シドル」についてはその規模の大きさを、住民の実体験を通して聞くことができた。「シドル」以後の様子も、今後同レベルのサイクロンが襲来した際、援助の参考となるものが得られたのではないかと。シェルターについても、テイラとの違いを認識できたことや、どれほど不足しているかということ住民の声を通して聞くことができた。学校や道路・橋・病院・産業・衛生状態・社会的弱者などの現状も、今回の調査を通して具体的に変わったのではないだろうか。

今回の調査がよき参考となってプロジェクトなどが立ち上がるなど、1 つでもいい影響を与えられることを願ってやまない。

以上

5. 付録(写真)

サイクロン災害直後のボランティアによる救援活動 (2008年1月撮影)



サイクロンで倒壊した民家の再建を手伝う国際ボランティアのメンバーと村人達



衛生環境向上のためのトイレ作りを手伝うボランティア



被災地現況 (2008年10月撮影)



サイクロン襲来時には数百名の村人が避難するシェルターであるが、施工の質が悪く、致命的な構造上の欠陥が露見されている。それでも、通常は数少ない学校として使用されている



学校や病院に行くにも、日常生活でも渡らなければならない唯一の橋



川にタレ流し式のトイレ